

〈研究ノート〉

## 精神保健福祉士の認定スーパーバイザー養成研修における 着眼点に関する予備研究

森 山 拓 也 ・ 村 上 貴 栄  
吉 岡 夏 紀 ・ 中 村 雅 代

### 【要旨】

本研究は、精神保健福祉士のスーパーバイザー養成研修における査読コメントを対象に、計量テキスト分析を用いて指導の着眼点を探索的に検討した予備研究である。2023年度に開催された第19回認定スーパーバイザー養成研修において、査読者10名が作成した中間査読コメント14文書を分析対象とし、頻出語の抽出、共起ネットワーク、クラスター分析、対応分析を実施した。その結果、レポート5項目ごとに特徴的な語彙の使用傾向が認められ、査読者が項目ごとに共通する視点に基づいてコメントしている可能性が示唆された。これらの知見は、スーパーバイザー養成における指導の焦点を把握する上で有用であり、今後の研修設計や達成度指標の構築に資するものである。

**キーワード**：スーパービジョン、スーパーバイザー養成、養成の着眼点、計量テキスト分析

### 1. はじめに

スーパービジョンは、スーパーバイザー（熟練のワーカー）が、スーパーバイジー（経験の浅いワーカー）に対して、その人の能力を最大限に生かして、より良い実践ができるように責任をもって教育訓練を行うものである（久保，2004）。対人援助職の成長にとって重要な訓練の方法の一つとして、1970年代から1980年代の慈善組織協会活動をその源流として発展を続けてきた（Mieke, B・Brenda, B, 1990／川田訳，1994）。しかし、これまでの日本では、社会福祉実践においてスーパービジョンは不可欠なものであるとされていながら、スーパービジョンが根付いていないと指摘される状況が続いている（窪田，1997；塩村，2000；堀越，2022）。

こうした状況にあるにもかかわらずソーシャルワーカーの国家資格である社会福祉士、精神保健福祉士では、養成カリキュラムの中において、「ねらい（目標）」や「教育に含むべき事項」という形で指定科目の教授内容として複数科目の複数箇所に明示されている（厚生労働省，2020）。そのため近年では、ソーシャルワーク職能団体や各地の社会福祉関係団体等によるスーパービジョン研修が盛んに行われている。主に保健医療分野で働くソーシャルワーカーの

職能団体である日本医療ソーシャルワーカー協会では2012年よりスーパーバイザー養成認定研修を開催している（宮崎，2017）。社会福祉士の職能団体である日本社会福祉士会では、2011年に認定社会福祉士認証・認定機構を設立し、2013年度から経過措置のスーパーバイザー登録を開始している（藤林，2019）。精神保健福祉領域のソーシャルワーカーの職能団体である日本精神保健福祉士協会も2003年度より認定スーパーバイザー養成研修を開催している。塩満（2023）は、2007年改正の「社会福祉士法」及び2011年改正の「精神保健福祉士法」で、有資格者に対する「資質向上の責務」について追記されたことが各職能団体のスーパービジョン体制構築の後押しとなったと指摘している。

この様にいずれのソーシャルワーク職能団体ともスーパービジョンの普及に向けて、その担い手であるスーパーバイザーの養成に取り組んでいるが、その養成内容は団体ごとに異なっている。本稿では、ソーシャルワーク職能団体の中で筆者が所属している日本精神保健福祉士協会（以下、日本PSW協会）のスーパーバイザー養成について検討していく。

## 2. 研究背景

### 2.1 日本精神保健福祉士協会のスーパービジョン体制構築の変遷

精神保健福祉領域のソーシャルワーカーに対するスーパービジョンの必要性は、その職能団体である日本精神医学ソーシャル・ワーカー協会（以下、日本PSW協会<sup>1</sup>が設立された1964（昭和39）年の当初より認識されてきた。1966年に開催された第2回全国大会では「精神医学ソーシャル・ワーカーの教育における問題点」というパネルディスカッションが開かれ、そこでスーパービジョンという言葉が散見されている（日本PSW協会，1966）。また1969年発行のPSW通信第16号において『PSWとスーパービジョン』が特集されている（日本PSW協会，1969）。

1997年に精神保健福祉士法が成立したことを受け、日本PSW協会は、精神保健福祉士としてのアイデンティティおよび専門性の質を担保するため、従来の研修体系を踏襲しつつ、スーパービジョンおよび継続研修の体系化を喫緊の課題に据えた。1999年には、協会機関紙『精神保健福祉』において、柏木昭氏をスーパーバイザーとして紙上スーパービジョンを開始した。これに伴い、協会はスーパービジョンおよび研修体系の構築に向けて、アンケート調査やモデル研修を実施し、2002年には認定スーパーバイザー養成委員会を組織、2003年度より研修の開催に至った（佐々木，2007）。

2024年の精神保健福祉士の養成カリキュラム改正に際しても、より効果的な卒後教育および継続教育の実現を目指し、職能団体等による研修やスーパービジョンの活用を通じて、専門職としての質の担保・向上を図る仕組みの検討が行われた。現在においても、スーパービジョン体制の整備は精神保健福祉士にとって重要な課題である。2023年度より改正された認定精神保健福祉士の更新制度においても、スーパービジョンは研鑽の柱として位置づけられてい

る。しかしながら、2025年9月時点での認定スーパーバイザーの登録者数は135名（日本PSW協会、2025）にとどまり、構成員数に対して十分とは言えず、さらなる養成が求められている。

## 2.2 日本PSW協会の認定スーパーバイザー養成研修概要

2003年度より日本PSW協会が開催してきた認定スーパーバイザー養成研修の内容は、何度かの改正を経ながら、2018年度に開催された第14回の研修からは図1に示される通りの研修スケジュール（柏木、2020）となっている。

申込者は書類審査に合格した後、基礎編の3日間の研修を受講する。この基礎編での研修受講内容に対して審査が行われ、合格すると受講者は実践編として、各々がスーパーバイザーを募集し、そのスーパーバイザーに対して試行的な個別スーパービジョン（以下、試行スーパービジョン）を実施する構成となっている。試行スーパービジョンを3回以上実施した後、その中間時点において研修（以下、実践編研修）を受講するが、実践編研修受講前に「個別スーパービジョンの実施」に関する約4,000字の中間レポートを提出する。この中間レポートには以下の5項目を記載することが求められている（以下の①～⑤を総称して「レポート5項目」とする）。

- ①契約までの経緯および契約の要件
- ②ゴール設定と共有
- ③スーパービジョンの過程
- ④スーパーバイザーとスーパーバイジー両者による相互評価
- ⑤考察と質疑

中間レポート提出後、約1ヵ月以内に査読者からコメントが返送される。査読体制として受講者1名につき主査1名、副査1名が配置され、受講者と査読者の間にはブラインド方式が採用されている。主査は800～1,000字、副査は約400字のコメントを作成することが求められている。実践編研修当日に受講者と査読担当者のブラインドが解除され、中間レポートを基にした「演習」が行われるほか、査読担当者との「個別面談」が実施される。この個別面談では、前半のスーパービジョン実践を振り返り後半の実践に向けた修正点を確認する。この実践編研修についても審査が行われ、合格すると後半の試行スーパービジョンに進む。試行スーパービジョンの前半後半合わせて6回以上のスーパービジョンについて最終レポートを提出し、審査および査読に合格した者に対して、認定スーパーバイザー資格が付与される。

認定スーパーバイザー資格を取得した者は、資格を維持するために5年ごとの更新研修を受講する必要がある。現在、中間レポートの査読は認定スーパーバイザー養成委員会の委員が担当しているが、現行の委員体制では年間最大15名程度の受講者に対応するのが限界である。したがって、今後より多くの認定スーパーバイザーを養成するためには、研修内容および体制の再検討が必要な段階にある。

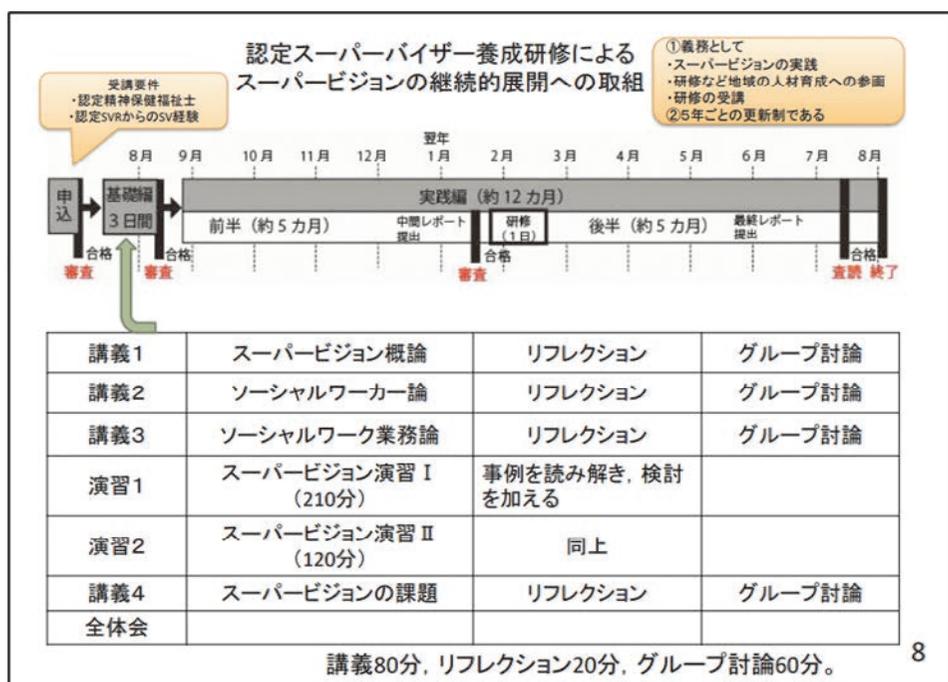


図1 認定スーパーバイザー養成研修スケジュール

(出典：第5回精神保健福祉士養成の在り方等に関する検討会資料2、P8)

### 3. 研究目的

本研究は、認定スーパーバイザー養成研修における査読コメントを対象に、査読者がどのような視点からコメントを行っているかを明らかにすることを目的とする。これにより、スーパーバイザー養成における指導の焦点や一貫性を探索的に検討する。

### 4. 研究方法

#### 4.1 研究デザイン

本研究は、日本PSW協会が実施した認定スーパーバイザー養成研修において、研修指導の一環として提供された査読コメントを対象とした後ろ向きコホート研究である。

#### 4.2 分析対象

分析対象は、2023年に開催された第19回認定スーパーバイザー養成研修において、受講生への指導の一環として10名の査読者が作成した、14件の中間査読コメントである。

この中間レポートを基にした査読コメントは、受講者にとって軌道修正の指針となるものであり、査読者がどのような点に着目しているかが反映された内容となっている。査読コメントは、レポート5項目（①契約までの経緯および契約の要件、②ゴール設定と共有、③スーパー

ビジョンの過程、④スーパーバイザーとスーパーバイジー両者による相互評価、⑤考察と質疑)に基づいて作成され、指導の焦点を示す重要な資料である。

以上の理由から、本研究では主査による査読コメントを分析対象として選定した。

### 4.3 分析手法

分析にはKH Coder3.03a (樋口, 2020) を用いた計量テキスト分析を採用し、頻出語の抽出、語の共起パターン、クラスター分析および対応分析を通じて、査読コメントにおける指導内容の着眼点の傾向を明らかにした。KH Coderにおける計量テキスト分析とは、計量的手法を用いてテキストデータを整理・分析し、内容の構造や傾向を把握する方法である。本研究は、スーパーバイザー養成に関する査読者の視点を明らかにすることを目的としており、膨大なデータ処理に適している点、ならびに研究者の恣意的な解釈を排除し、定性的データから定量的な知見を導出可能である点において、計量テキスト分析が適していると判断した。

### 4.4 倫理的配慮

本研究は、城西国際大学研究倫理委員会の承認を得た上で、倫理的配慮を講じて実施した(承認番号24B24049、2025年1月24日承認)。

分析対象である査読コメントを作成した査読者10名に対し、研究の事前に研究目的や意義、研究内容、研究参加に伴う危険性、起こりうる利害、研究参加の任意性(参加は任意であり、参加しないことで不利益な対応を受けないこと。また、いつでも同意を撤回でき、撤回しても何ら不利益を受けないこと。撤回した場合は、収集した個人情報および研究データは破棄し研究に使用しないこと)、個人情報の取り扱い、研究成果の公表(被験者が特定できないようにしたうえで、学会や学術誌等で公表すること)などを書面にて説明を行い、参加同意書への自筆による署名をもって研究協力の同意を得たうえで研究を開始した。

## 5. 結果

本研究における分析対象文書数は274件であり、総抽出語数は8,769語であった。そのうち、実際に使用された語数は3,287語である。異なる語彙数は1,052語であり、そのうち使用語彙数823語に対して分析を実施した。

テキストマイニングの分析を行うにあたり、略語や同義語といった表記ゆれの修正等のデータクリーニングを行った。例えば「ソーシャルワーカー」「精神保健福祉士」「PSW」「SW」などソーシャルワーカーである精神保健福祉士を表しているものについては「ソーシャルワーカー」に統一、また「スーパーバイジー」や「SVE」などの表記についても「スーパーバイジー」というカタカナ表記に統一した。

## 5.1 抽出語

表1は、抽出語上位59語のリストであり、査読コメントにおいて特に多く用いられた語彙の傾向を示すものである。これらの頻出語は、査読者が中間レポートにおいてどのような点に着目しているかを把握する上での基礎的データとなる。

表1 抽出語 上位59語

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
スーパーバイジー	175	説明	13	共有	9
スーパービジョン	149	やり取り	12	思い	9
スーパーバイザー	97	プロセス	12	支援	9
感じる	30	具体的	12	取り上げる	9
ゴール	29	検討	12	双方	9
事例	27	面談	12	展開	9
記載	26	目的	12	変化	9
記述	24	ソーシャルワーカー	11	気になり	8
確認	23	自身	11	気持ち	8
評価	22	場面	11	契約	8
語る	21	振り返る	11	経過	8
考える	20	深める	11	今後	8
内容	20	大切	11	姿勢	8
ゴール設定	18	テーマ	10	自分	8
気づく	18	経緯	10	伝える	8
教える	18	行う	10	都道府県協会	8
理解	16	実践	10	発言	8
話す	16	進める	10	様子	8
設定	14	意識	9	両者	8
相互評価	14	意図	9		

(筆者作成)

## 5.2 使用語彙の関連性

共起パターンの分析結果を図2に示す。査読コメントに含まれる語彙は7つのグループに分類された。これらのグループは、語と語の関連性を可視化した「共起ネットワーク」に基づいて抽出されたものであり、円の大きさは語の出現頻度（frequency）、線の太さは語同士の関連性の強さを示している。

各グループに含まれる語については、KWIC（Key Word In Context）コンコーダンス機能を用いて原文の文脈を確認し、認定スーパーバイザー養成委員会の委員である共著者3名との協議のもと、01. ソーシャルワーカーとして、02. ゴール設定、03. 相互評価、04. 各回で深めているもの、05. 意図や経緯、06. 内容の記載、07. 実践の振り返りの7グループとしてそれぞれを命名した。



ポート5項目の④「相互評価」では、「相互評価」「評価」に強い関連が認められ、特徴づけられている語であった。レポート5項目の⑤「考察と質疑」では、強い関連を示す語は見られなかったが、「スーパーバイザー」「スーパービジョン」に関連があった。

表2 レポート5項目それぞれを特徴づける語

1		1と2		2		3	
都道府県協会	.222	時間	.250	ゴール設定	.359	スーパーバイザー	.313
契約	.189	正確	.222	ゴール	.216	スーパービジョン	.287
説明	.171	モヤモヤ	.200	設定	.191	事例	.171
経緯	.150	感	.200	考える	.140	語る	.131
応募	.111	伝わる	.154	共有	.122	内容	.099
公募	.111	限る	.111	感じる	.117	記述	.089
募集	.111	後輩	.111	具体的	.089	プロセス	.086
教えて	.102	笑い	.111	期待	.077	話す	.083
行う	.095	資料	.111	丁寧	.073	気づく	.082
協力	.083	承知	.111	提案	.073	記載	.078
4		5					
相互評価	.297	スーパーバイザー	.183				
評価	.244	スーパービジョン	.163				
スーパーバイザー	.188	感じる	.095				
スーパーバイザー	.124	考察	.094				
確認	.115	意識	.091				
スーパービジョン	.113	言語化	.077				
と	.108	考える	.076				
感想	.108	記載	.074				
印象	.105	変化	.073				
率直	.105	確認	.073				

(筆者作成)

#### 5.4 レポート5項目を外部変数とした対応分析

査読コメントのレポート5項目を外部変数とした対応分析を実施し、クロス集計の結果をバブルプロットとして2次元の散布図に可視化したものを図3に示す。関連性の強い語ほど近接し、関連性の弱い語ほど遠くに配置される(樋口, 2020)。これは、レポート5項目間における関連性の違いを示唆するものである。

今回の対応分析では、レポート5項目の①、②、④はX軸・Y軸上で離れて配置されており、それぞれの関連性が弱いことを示しており、独立した語を使用しているといえる。一方で、レポート5項目の③および⑤は近接した位置に配置されており、関連性が強い語を使用していた。



図3 査読コメントとレポート5項目の対応分析 散布図（筆者作成）

### 5.5 抽出語とレポート5項目の共起ネットワーク

抽出語とレポート5項目①から⑤との共起ネットワークを作成し、図4のような関連性が確認された。語と関連のあるレポート項目の数の違いを色で示している。

「スーパービジョン」と「スーパーバイザー」はレポート項目の5項目全てと関連がみられた。また「スーパーバイザー」の語はレポート5項目①と②、レポート5項目の①以外の4項目との関連がみられた。「感じる」の語は、レポート5項目①と②、レポート5項目の①、レポート5項目の④以外の3項目との関連がみられた。

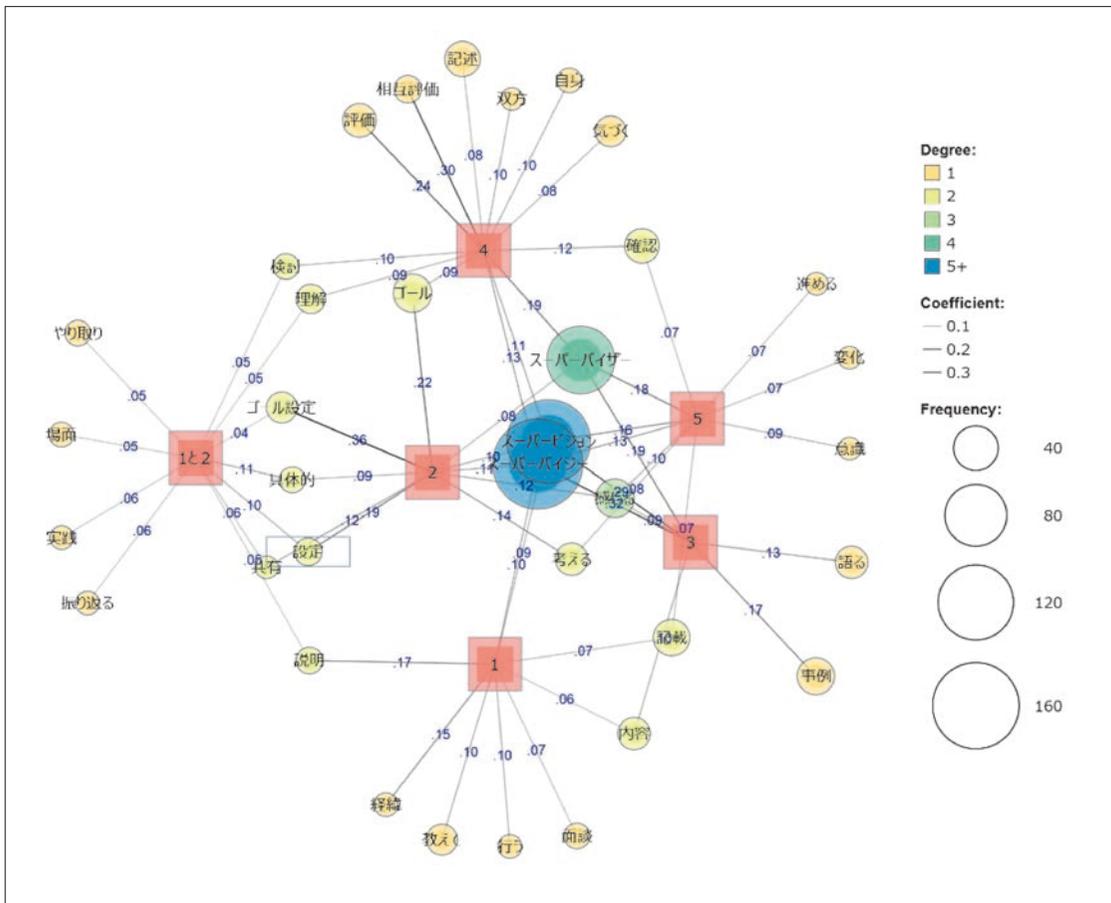


図4 抽出語とレポート5項目との共起ネットワーク（筆者作成）

## 6. 考察

### 6.1 抽出語とレポート5項目、共起ネットワーク7グループの分析

査読コメントにおける語彙の使用傾向を明らかにするため、図2の共起ネットワークと図4の抽出語とレポート5項目との共起ネットワークを比較検討した（図5）。その結果、各レポート項目に特徴的な語彙が存在し、査読者が項目ごとに異なる視点からコメントを行っている可能性が示唆された。

具体的には、レポート項目①「契約までの経緯および契約の要件」では、「経緯」「教える」「行う」「面談」などの語が関連しており、「意図や経緯」グループとの一致が見られた。項目②「ゴール設定と共有」では、「ゴール設定」「具体的」「設定」「共有」などの語が関連し、「ゴール設定」グループとの対応が確認された。項目③「スーパービジョンの過程」では「事例」「語る」などが、項目④「相互評価」では「評価」「相互評価」「記述」「双方」「自身」「気づく」などが、項目⑤「考察と質疑」では「進める」「変化」「意識」などが、それぞれ特徴的な語として抽出された。これらの結果は、契約の透明性、目標の妥当性、事例を通じた学び、

相互的な省察、批判的考察といった観点で、それぞれの項目に対応する形で査読者のコメントに反映されていることを示している。

以上の分析から、共起ネットワークに基づく7つのグループと各レポート項目との対応関係は、査読者が項目ごとに異なる評価基準を持ちながらも、一貫した視点で指導を行っていることが示唆される。したがって、査読コメントは単なる指摘の集積ではなく、体系的な教育的意図を持ったフィードバックの構造を形成している可能性が高いと考えられる。

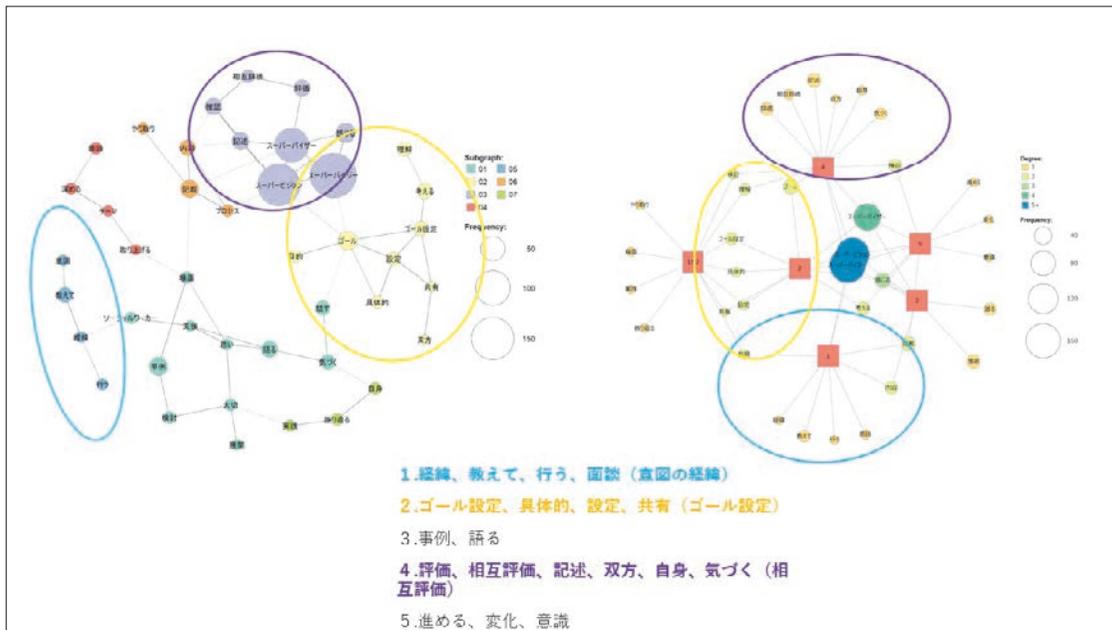


図5 抽出語とレポート5項目、共起ネットワーク7グループの分析（筆者作成）

## 6.2 査読者によるレポート5項目表記の違いについて

本研究では、第19回認定スーパーバイザー養成研修において作成された14件の中間査読コメントを分析対象とした。そのうち1件においては、レポート項目①「契約までの経緯および契約の要件」と②「ゴール設定と共有」が統合された形で記述されていた。データクリーニングの段階で除外も検討されたが、本研究が予備的検討であることを踏まえ、分析対象として残す判断をした。

レポート項目①と②を外部変数としたJaccard係数による類似性分析（表2）では、「時間」「正確」「モヤモヤ」「感」などの語が強く関連していた。また、対応分析の散布図（図3）においても、項目①と②は近接して配置されており、語彙的な類似性が示唆された。さらに、共起ネットワーク（図4）においても、項目①と②は「理解」「ゴール設定」「具体的」「設定」「共有」などの語と共に関連づけられていた。

そこで改めてKWICコンコーダンス機能を用いて原文の文脈を確認すると、項目①と②を一

的に捉えてコメントしているこの査読者が、内容的には項目②についての記述が中心であったことが示された。

以上のことから、今後分析対象を拡大する際には、こうした表記のゆれを理由にデータを除外するのではなく、内容に基づいて精査し、分析対象とする可能性を検討する必要がある。

### 6.3 レポート項目①～⑤の関連性について

対応分析の結果（図3）では、レポート項目③「スーパービジョンの過程」と⑤「考察と質疑」が近接して配置されており、語彙的な関連性が示唆された。抽出語とレポート5項目との共起ネットワーク（図4）においても、両項目は「スーパーバイザー」「スーパービジョン」「スーパーバイジー」「感じる」といった語と共に関連づけられていた。

Jaccard係数の分析では、「スーパーバイザー」は項目③で0.16、⑤で0.18、「スーパービジョン」は③で0.29、⑤で0.16、「スーパーバイジー」は③で0.32、⑤で0.13、「感じる」は③で0.09、⑤で0.10と、いずれも両項目において一定の関連性が認められた。特に項目③はスーパービジョンの実践過程に関する記述であるため、これらの語が高頻度で使用されることは妥当である。項目③と⑤は、スーパービジョンの実践とその振り返りという共通の文脈を持ち、関連する語彙が重複して使用されていることが明らかとなった。

また、対応分析の結果（図3）や抽出語とレポート5項目との共起ネットワーク（図4）では、項目①は、項目②および項目③と近接している。そして項目④は、項目②および項目⑤に近接しているという共通した位置関係で表示されている。これにより、「契約までの経緯および契約の要件」が「ゴール設定」・「共有」・「スーパービジョンの過程」と共通した文脈を持ち、関連する語彙が重複して使用されていることが明らかとなった。そしてスーパーバイザーとスーパーバイジー両者による相互評価が「ゴール設定」と「共有」、「考察と質疑」に共通した文脈を持ち、関連する語彙が重複して使用されていることが明らかとなった。

以上の結果は、査読者が項目①から⑤のそれぞれの項目間で連続的・相補的なものとして捉えている可能性を示唆しており、今後の研究においても項目間の関係性を検討する必要がある。

### 6.4 本研究の限界と今後の課題

本研究は、2023年度に開催された第19回認定スーパーバイザー養成研修において、査読者10名が作成した中間査読コメント14文書を分析対象とした予備的検討である。認定スーパーバイザー養成研修は、2024年度の第20回研修までに計18回実施されており、本研究はそのうちの1回分、14名の受講者に対するコメントに限定された分析である。

したがって、本研究の成果を一般化するには慎重な検討が必要であり、今後はより多くの研修回および受講者を対象としたデータの収集と分析を進める必要がある。また、査読コメントの記述形式や内容のばらつきにも留意し、分析手法の精緻化を図ることが求められる。さらに、査読コメントにおける着眼点の抽出を通じて、スーパーバイザー養成における指導内容の

共通性や多様性を明らかにし、達成度指標の構築に資する知見を蓄積することが今後の課題である。これにより、スーパーバイザー養成の質的向上および研修プログラムの体系化への貢献が期待される。

## 7. 結論

本研究では、認定スーパーバイザー養成研修における中間査読コメントを対象に、計量テキスト分析を用いて、査読者が各レポート項目においてどのような語彙を用いているかを明らかにした。その結果、レポート5項目ごとに特徴的な語彙の使用傾向が認められ、査読者が異なる場合であっても、各項目において共通する視点に基づいてコメントを行っている可能性が示唆された。

特に、「契約までの経緯および契約の要件」や「ゴール設定と共有」などの項目においては、関連語の重複や語彙の近接性が確認され、査読者の指導が一定の観点に基づいて行われていることが示された。また、「スーパービジョンの過程」と「考察と質疑」の項目間には語彙的な関連性が認められ、両者が実践の振り返りという共通の文脈を持つ可能性が示唆された。

これらの知見は、スーパーバイザー養成における指導の焦点や一貫性を把握する上で有用であり、今後の研修設計や達成度指標の開発に向けた基礎的資料となる。今後は、より広範なデータを用いた分析を通じて、スーパーバイザー養成の質的向上と体系化に資する実証的知見の蓄積が求められる。

### 【注】

- 1 日本PSW協会という表記について、日本精神保健福祉士協会は2020年より英語表記をJAMHSW (Japanese Association of Mental Health Social Workers) としている。それ以前は、1964年に日本精神医学ソーシャル・ワーカー協会として設立され、1999年に日本精神保健福祉士協会と名称変更がなされたが、英語表記は設立当初よりJAPSW (Japanese Association of Psychiatric Social Workers) としていた。本稿ではJAPSW時代から現在にわたる協会活動について論じるため日本PSW協会という略称を用いた。

### 【文献】

- Mieke, B., Brenda, B. (1990) 『Social Work Practice in Health Care』, 児島美都子・中村永司 (監訳) (1994) 『医療ソーシャルワークの実践』 ミネルヴァ書房, 川田誉音「歴史的展望」 p.6.
- 藤林慶子 (2019) 「認定社会福祉士におけるスーパービジョン」 第49回全国社会福祉教育セミナー 2019 in 愛知, p.13.

- 樋口耕一（2020）『社会調査のための計量テキスト分析 第2版—内容分析の継承と発展を目指して』ナカニシヤ出版.
- 樋口耕一（2012）「Re: Jaccard係数の読み方（大きさ）」『KH Coder 旧掲示板（Jaccard係数）』  
[https://kncoder.info/cgi-bin/bbs\\_khn/khcf.cgi?&no=1241&reno=1240&oya=1235&mode=msgview](https://kncoder.info/cgi-bin/bbs_khn/khcf.cgi?&no=1241&reno=1240&oya=1235&mode=msgview)（2025年10月8日取得）
- 樋口耕一（2020）「対応分析から見る上・中・下の特徴」『社会調査のための計量テキスト分析 第2版—内容分析の継承と発展を目指して』ナカニシヤ出版, p.43.
- 堀越由紀子（2022）「日本におけるソーシャルワークのスーパービジョン—課題と展望—」『社会福祉研究』143, pp.24-33.
- 日本精神医学ソーシャル・ワーカー協会（1966）『精神医学ソーシャル・ワーク』2(1).
- 日本精神医学ソーシャル・ワーカー協会（1969）『P.S.W.通信』No.16.
- 公益社団法人日本精神保健福祉士協会（2025）「認定スーパーバイザー」  
<https://www.jamhsw.or.jp/kaiin/kensyu/8.html>（2025年10月8日取得）
- 柏木一恵（2020）「公益社団法人日本精神保健福祉士協会 生涯研修制度について」厚生労働省『第5回 精神保健福祉士の養成の在り方等に関する検討会資料2』 p.8.  
<https://www.mhlw.go.jp/content/12200000/000590631.pdf>（2025年10月8日取得）
- 久保絃章（2004）『精神保健福祉用語辞典』中央法規出版, p.295.
- 窪田暁子（1997）「福祉実践におけるスーパービジョンの課題」『月刊福祉』80(10), p.18.
- 厚生労働省（2020）「社会福祉士養成課程のカリキュラム」  
<https://www.mhlw.go.jp/content/000606419.pdf>（2025年10月8日取得）
- 厚生労働省（2020）「精神保健福祉士養成課程のカリキュラム」  
<https://www.mhlw.go.jp/content/000604982.pdf>（2025年10月8日取得）
- 宮崎清江（2017）「日本医療社会福祉協会におけるソーシャルワーク・スーパービジョンへの取り組み」『保健の科学』59(12), pp.824-825.
- 佐々木敏明（2007）「認定スーパーバイザー養成研修の課題」『精神保健福祉』38(1).
- 塩村公子（2000）『スーパービジョンの諸相』中央法規, p.20.
- 塩満卓（2013）「スーパーバイザーになっていくプロセスとスーパービジョン体制整備の課題」『佛教大学社会福祉学部論集』19.

# A Preliminary Study on Key Perspectives in the Training Program for Certified Supervisors of Mental Health Social Workers

Takuya Moriyama, Takahide Murakami, Natsuki Yoshioka, Masayo Nakamura

## Abstract

This preliminary study explores the instructional focus in supervisor training for certified mental health social workers by applying quantitative text analysis to peer review comments. The analysis targets 14 midterm review documents authored by 10 reviewers during the 19th Certified Supervisor Training Program held in fiscal year 2023. Techniques employed include extraction of frequently used terms, co-occurrence network analysis, cluster analysis, and correspondence analysis. The results revealed distinctive patterns of vocabulary usage across the five report items, suggesting that reviewers may have provided comments based on shared perspectives specific to each item. These findings offer valuable insights into the focal points of instruction in supervisor training and may contribute to future program design and the development of achievement indicators.

Keywords: Supervision, Supervisor Training, Focus Areas in Training, Quantitative Text Analysis